

「社会科教育法」における 授業の基本について (その1)

Practice of Teaching-Method of Subject Education (Social Studies)

小栗正彦 (Masahiko OGURI)

A series of teaching practices with a view to the improvement of the method of subject education will be reported from now on, preceding which this paper broadly discusses the fundamental ways of thinking of how to frame classes in social studies effectively. Concrete discussions and explanations of each of them will be made in the following papers. At the end of this one, books of reference are intentionally introduced. Those who are to practice teaching are wished to read them before they visit school and work as student teachers.

はじめに

40年の間、中学の現場で社会科、高校ではいまでいう公民科、地歴科の授業を担当してきたが、2005年度から大学での教職課程科目「教科教育法(社会科)」の講義を担当することになった。

教職課程科目の必修科目の一つである「教科教育法(社会科)」は、学生たちが教育実習をするにあたって、極めて実践的な指導内容が要求される科目である。しかし、学生たちの中学校社会科、高等学校公民科、地歴科の授業に対する思いはさまざまである。それは学生たちがこれまで経験してきた授業の反映でもある。否、授業だけでなく、学校教育全てに対する反映でもある。

したがって、私の講義はそのことを踏まえた上で、「授業の基本」とは何かについて語ることから始まった。つまり、授業の内容は非常に大切なことだが、その前に「授業で最低限注意しなければならないことは何か」ということから講義は始まった。

1. 授業の進め方

ここで授業の内容を記しておく。

はじめの3時間までは、教科カリキュラムの変遷に関する講義を行った。

その後、教育実習時と同じように、学生に対して2週間後にどの部分の授業を教壇実習させるかを予め指名し、学生はその部分の教案を作成し、授業を行う。

持ち時間は学校現場で行われているのと同じ50分とする。残りの40分でその授業に対して私も含めての討論会とする。

しかし、はじめてみるとこのような授業のやり方がうまく機能しない。まず、授業者に対する「感想」が出ない。授業者が授業を終えた時には大きな拍手をするが、いざ「いまの授業の良い部分、悪い部分を具体的に指摘せよ」と言うと、まったくそれができない。

「できない」のではなく、「しようとしなない」のである。こんな所にも現代の若者の一面が出ているように思えた。こちらが「大学という場は『論理』を学ぶ所です。こんな批判をすると彼を傷つける、などという心配は無用です。それが大学での学びなんです」と言っても駄目だった。そこで、この「感想」については授業の終わった時に用紙を配付し、次の時間までに書いて提出すると言った。すると多くの学生が、授業の内容について「眠かった」「板書した字が小さくて見えなかった」「ノートばかり見えていて…」などということを書くようになった。その感想文は次の授業の時に無記名で、私の厳しいコメントをつけて、全員に配付した。

2. 大切な「授業の基本」

授業の「見方」「聞き方」についても、「こんなことに注意して、授業を受けるようにしてみよう」と、最初にかなり具体的なことを注意しておいた。それは4年次に教育実習

にいった時、担当の先生から注意されるのではないか、ということ考えたからである。

- (1) まず「笑顔」で教壇に立っているか。
- (2) 声は教室のうしろまで届いているか。
- (3) 説明する時にノートや黒板の方ばかり見ていないか。生徒たちの顔を見ながら説明することができているか。
- (4) 黒板に書く字の書き順を間違えていないか。生徒たちが見てノートにメモしやすく、しかもわかりやすく書かれているか。
- (5) 言葉につまらず、なめらかに説明ができているか。
- (6) 教室が「シーン」とし、生徒たちが先生のいうことや黒板に書かれた文字をただ黙って書き写しているだけ、という授業になっていないか。

以上のことはいずれも「授業以前」のことである。ある先生に言わせると「授業は扱う内容が大切」という。それはそれで正しいのだが、それ以前に上記のことが教育の現場では、限りなく大切となるのである。教育実習中の訪問指導に行つてよく目にする光景だが、英語の授業で本当に辛そうに授業をしている学生がいる。そんな学生に教えてもらっている生徒もつらい。

「あの先生はあんなにきれいな発音で英語を喋ることができる。きっと外国へ行つても困らず、楽しいだろうな。私もあんな風に英語が話せるようになりたいなあ」と生徒が羨ましそうに、憧れの目で見えてくれるような、そんな先生であつてほしい。授業における生徒への「語り方」は、私たちが思う以上に大切なことなのである。

自分が大学で専門分野をしっかりと学び、その学問の面白さを体験し、その面白さを生徒たちに伝えたいと思う。そこにこそ「授業の基本」がある。そして、教科における授業がわかりやすく（それこそ科学的、学問的であるということなのだが）、生徒たちにとって興味深いものであれば、時に生徒を厳しく叱ろうが、必ず生徒は真正面から受け止めてくれるものなのである。

3. 具体的な授業での内容

地理的分野について3時間程勉強した後、歴史的分野に入った。ところが、この分野に入ると、学生たちの授業は急にレベルが落ちてきてしまった。「日本歴史の一般的な時代区分を旧石器時代から順番に言つてごらん」と質問しても答えられないのである。旧石器時代→縄文時代→弥生時代→古墳時代と、ここまでは曲がりなりに答えられなくても、古墳時代から後がわからない。いきなり奈良時代という学生や、古墳時代→大和朝廷の時代→氏姓制度の時代→奈良時代という学生もいる。鎌倉時代と室町時代の前後関係を答えられなかった学生もいた。ましてや室町時代から江戸時代の時代区分など無理な話し。戦国時代が室町時代のなかの後半100年間のことを指すのだ、ということを知らなかった学生がいたり、織豊政権と戦国時代の前後関係などが頭のなかできちっと整理されている学生はほとんどいない。これが来年には教壇に立つ学生なのか、と途方にくれていると、彼らがつぶやいた言葉を聞いて「ハッ」としたのである。「だって僕は中2の時から日本史など勉強した後がわからない。そうだったんだ。彼らが学んできたカリキュラムでいえば、中学校1、2年生の時にπ(パイ)型で地理的分野と歴史的分野を学習して以来「日本史」の勉強はしていないのである。大学入試では日本史が暗記事項が多くて、しかも内容がむづかしいので、日本史を学ぼうとはしなかったのである。（つまり地歴科での必修は「世界史」だけなのである）。そういう学生が本学の現代社会学部に入學し、そこで中学校教諭一種免許状（社会）の取得志望者となる。本学には「歴史学科」はないので、世界史や日本史を本格的に学ぼうとする学生はいない。本学における教職課程科目「教科教育法（社会）」の授業はそういう状況下で行われるのである。

4. 歴史的分野の授業で注意すること

生徒たちに「歴史を教える」ということの基礎は何だろうか。新学習指導要領は「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」が大切であるという。これは正しい。しかし、教師の側からこの言葉を考える時、学生たちは教壇で生徒とどう向き合えばよいのか。さらに、やがて教壇に立つ目の前の学生に対して、私は自分に課せられた「社会科教育法」なる科目で何を講義すればよいのか。

そこで私は、とりあえずこの1年で日本の重要で、なおかつわかりにくい部分の歴史をとりあげて講義をしようと考えた。「教科教育法（社会）」の授業は中学校の社会科の教師養成のためにある教科なのだが、あくまで高校レベルの高い内容にした。このことについて付言すると、高度な内容にしても本当に事の本質が理解できるということは、授業の仕方次第だと思っている。

以下がその内容である。

- (1) 歴史上の「時代区分」とは何なのか。時代区分はなぜ必要なのか。
- (2) ヨコの世界史（歴史の同時代性とは）
 - ・ B. C. 500年の世界史
ローマの共和政、ギリシアの民主政（ギリシャ哲学）、アケメネス朝ペルシアの繁栄、インドにおける仏教・ジャイナ教の誕生、草原の道で活躍する匈奴、中国春秋・戦国時代（諸子百家の思想）
 - ・ 4世紀のユーラシア大陸
地球の寒冷化が歴史に与えた影響（ローマ帝国の東西分裂、ゲルマン民族の大移動、中国に南北朝時代、高句麗・百済・新羅の建国、大和朝廷の出現（古墳時代始まる）
 - ・ 8世紀のユーラシア大陸
ウマイヤ朝、フランク王国（カール大帝）、ビザンツ帝国（レオンⅢ）、アップース朝（ハルン・アル・ラシッド）、ウイグル王国、渤海王国、唐の全盛（玄宗皇帝）、奈良時代（天平文化、聖武天皇）
 - ・ 10世紀のユーラシア大陸
ノルマン民族の大移動、フランク王国の分裂、アップース朝の分裂、唐の衰退→五代十国→北宋（絹馬の道にそってガズニ朝・大理・西夏・遼・李朝大越国・バガン朝）、高麗、日本（延喜・天曆の治、承平・天慶の乱）
 - ・ 13世紀はモンゴルの世紀
 - ・ 14世紀のユーラシア大陸
英仏百年戦争、黒死病（ペスト）の大流行→封建制度の崩壊→ルネサンス・大航海時代・宗教改革、アジアに絶対主義国家の成立（オスマン帝国、ティムール帝国・サファール朝、ムガル帝国、明）
 - ・ 17世紀の世界
7年戦争（英仏植民地戦争）、イギリスに産業革命、アメリカ独立戦争、フランス大革命（その引き金？となった浅間山の大噴火）、エカテリーナⅡ
 - ・ 19世紀半ばの世界
アメリカ南北戦争、クリミア戦争、インドでシパーヒーの反乱、中国でアヘン戦争→太平天国の乱→アロー戦争、日米和親条約→日米修好通商条約締結（開国）、明治維新・イタリア王国・ドイツ帝国の誕生
- (3) 日本の歴史に関する重要で、しかも難解な部分
 - ・ 4～6世紀とはどんな時代だったのか
古墳時代、大和朝廷の時代、氏姓制度・部民制度・国造県主制度の時代
 - ・ 7世紀とはどんな時代だったのか（飛鳥時代・大和時代）
 - ・ 8世紀とはどんな時代だったのか
奈良時代とその理解の仕方
 - ・ 10世紀前半50年の歴史とは
なぜこの時代が日本の歴史のなかで重要視されるのか（古代から中世へ）
東アジアの一員としての日本
国風文化とは
 - ・ 13世紀（鎌倉時代）の歴史
気候の寒冷化が歴史に与えた影響
 - ・ 15世紀の東アジアと日本
銀は世界を駆けめぐる
 - ・ 戦国時代とはどのような時代だったのか
 - ・ 天下一統の力はなぜ尾張から
 - ・ 江戸時代における世界との交流
 - ・ 日本開国
それはなぜアメリカから
 - ・ かつて自由民権運動があった
 - ・ 明治時代の概観をわかりやすく理解する方法
 - ・ 昭和初期の歴史をわかりやすく理解する方法
 - ・ 戦後のわが国の歴史をわかりやすく理解する方法
- (4) 「絵を読む」ことの大切さ
 - ・ それは文学的な鑑賞であってはならない（図像学イコノロジーを学べ）

これらの詳しい講義内容については、次号以降にこの冊子に掲載していく。

5. 学生たちが錯覚する授業

学生たちの「模擬」教壇実習を聞いていて、大きな欠点に気がついた。授業というものを教科書のむつかしい歴史用語の解説だと勘違いしているのである。

例えば「わが国の7世紀の歴史を授業しなさい」という課題をだしたとする。まず彼は聖徳太子は593年に推古天皇の摂政になりました。摂政とはどういう意味がわかりますか。天皇の政治を助けることですね。そして聖徳太子が行ったこととして「三経義疏」について日本史用語集で引いてきたことをそのまま説明する。次に「冠位12階の制定や憲法17条の制定を行いました」。さらに「遣隋使を派遣し、仏教を盛んにしました」。最後に必ず「以上ここまで、わかりましたね」。

次に「中大兄皇子と藤原鎌足が645年に大化の改新をおこし、蘇我氏を滅ぼしました」「天智天皇は日本で最初の戸籍を作りました」「672年に壬申の乱がおこり、その後政治は天武天皇が握ることになりました」…というように、時々板書しながら淡々と授業を進めていくのである。その間、聞き役にまわっている学生は静かに、しかし面白くなさそうに、かといっておしゃべりをするわけでもなく（そんなことをしたら彼を傷つけてしまう…）、静かにノートをとっているのである。そして50分の授業が終わると、みんなが一斉に拍手する。

彼らはこれまでの経験から、授業とは「かくあるべき」と信じきっているのである。おそらく彼らの受けた授業は、こんな授業だったのだろう。したがって7世紀の歴史とはどんなものだったのか、前後の関連がまったくわからないので理解ができず、長い日本の歴史のなかでも、「7世紀」という古代にあって非常に重要な歴史的意義をもった時代の大切さを掴むことができず、試験の前になって聖徳太子・推古天皇の目指した政治一大化の改新という事件一天智天皇の政治一壬申の乱一天武・持統天皇が完成させた律令国家、という歴史的な出来事を前後の脈絡もなくただ丸暗記するのである。「歴史を学ぶ」というがこれでは、生徒にとって面白くはない。

6. 歴史の授業が「わかった」ということ

かつて私には「目から鱗」という言葉、ハツタと膝をたたいて「あっ、そうだったのか。それでわかった！」という経験がある。高校時代の世界史の時間に中国の歴史を学んでいた時であった。先生は「秦の始皇帝は北からの異民族の侵入を防ごうとして、万里の長城を作りました。が、その建設費が莫大なものになり、逆に国を滅ぼす結果になりました」という説明をされた。月から眺めることのできる唯一の建造物、という感動的な話とともに私の心にいつまでも残った。ところがしばらく後にテレビでヨーロッパ中世を舞台にした映画を見ていてふっと疑問がわいた。その映画で城を攻めるシーンがでてきたのだが、そこでは高い梯子を作ってそれを城の壁にたてかけ、多くの攻め手があつという間に駆け登って行ったのである。それを見ていて昔の疑問がよみがえってきた。たしかにそのドラマの時代と秦の始皇帝の時代とはかなりの隔りがあるが、目の前にある城壁を越えようとする時、このくらいの知恵は浮かばなかったのか。万里の長城くらいの高さなら人は簡単に乗り越えられるのではなからうか、とそれからずっと考えていた。

この疑問が解けたのは大学へ入ってからだった。東洋史の授業は高名な松田壽男先生だったが、私は長年胸に抱いていた疑問についてお聞きした。先生はいとも簡単に「ああ、そんなのわけないことですよ。匈奴でなくてもあの程度の壁など苦もなく越えられるでしょうね」とおっしゃった。「としたなら、なぜ始皇帝はあんな馬鹿なものを建設しようとしたのですか」と質問すると、先生はニコニコ笑いながらこう答えられた。「匈奴たちは簡単に越えられたでしょうね。しかし彼らは遊牧民なんです。彼らの生活は駱駝や羊がいてこそ成り立っているのですよ。駱駝や羊はハシゴを登ることはできないでしょう」。私はいまだにあの質問をした時の廊下の景色と、颯爽として研究室に戻っていかれる先生の背中を思い出すことができる。

さて、長々とごく個人的な体験を書いてきたが意味がわかっていただけたか。「歴史がわかる」ということはこういうことなのだ。ここまで単純化していかねばならないのだ。歴史を勉強していても、その論理が解けるといふことは、これほどまでに単純なところまで引っ張っていかねばならないのだ。ヘーゲルは「存在には理由がある」といったが、歴史上の事件や時代の動きの底には必ず「理由」というものが存在し、それを生徒たちの前に示してやれば、誰れもがハツタと膝を打って「ああなるほど、そういうことだったのか。ワカッタ！」という授業になるのである。

7. 「なぜ勉強しなければならないのか…」を教えることの大切さ

よく言われているように、いまの生徒の「学びのモチベーション」は低下している。

昔は学校で一生懸命に勉強してよい成績をとり、いい高校、大学に進学し、またそこで懸命に学んで有名大企業に入る。そうすれば後は年功序列でいくらしが保障される。かくして自分の親の時代よりは豊かなくらしが約束される、そんな時代であった。

いまはどうか。学校で一生懸命に勉強して、一流企業へ入ることができたとしても、あっという間にリストラされてしまう。否、その一流企業でさえ倒産して、なくなってしまういかねないのだ。あんなに苦勞して勉強したのは何のためだったのだ。

「いい大学」に入ったとしても、在学中におかしな宗教にのめり込み、あげくの果てに多くの人を殺して平然としている。大学で勉強するとはどういうことなのか。

あんなに必死になって勉強したのに、その結果がこれか。いまや大学が募集する定員数は志願者数を上回る。だったとしたら、なぜこんなにつらい思いをしてまで勉強しなければならないのか。

そしてその思いは「荘園制なんて勉強しても、自分の一生に役にたつのか、微積分はこれからの自分の一生に役立つ時があるのか」という懐疑とあいまって、「そこそこ楽しくやっつけてこうぜ」となる。こんな時代だからこそ、「学びのモチベーション」についてそれぞれの授業で語ってやらねばならない。それは学問の面白さを教えてやることである。本を読むことの楽しさを教えてやることである。「荘園制」が日本の歴史を学ぶ時になぜ大切なのか、1783年の浅間山の大噴火があフランス大革命の遠因となったことや、カリフォルニア金鉱の発見が日本の開国の引き金だったことを教えることなのだ。

8. 「本は読まなければならないもの」

教職課程科目を履修している際に、ぜひ「学びのために」ということについて考えてほしい。教壇に立った時に、生徒たちにぜひ「学ぶことの大切さ」ということを語ってほしい。これは教科教育法の授業の前提たるべきものだと思っている。私が高校の現場にあって生徒たちに語ったことについては、これも次号で書きたいと思うが、私の教科教育法の授業で必ず学生諸君に課題として読んでもらう本を載せておく。齋藤孝も下記の本で言っているように「本は読んでも読まなくてもいいというものではない。読まなければいけないものだ。こう断言したい」として、大学で学ぶ間に読まねばならない目安として「文庫100冊 新書50冊」をあげている。とくに中学社会科、高校公民科及び地歴科の教員免許状を取得しようとしている諸君は下記の本をぜひ手にしてほしいと、ことあるごとに訴えている。

- (1) 『図書館に訊け!』 井上真琴 ちくま新書 04.8
- (2) 『読書力』 齋藤孝 岩波新書 02.9
『教え力』 齋藤孝 宝島社 04.4
『子どもに伝えたい〈三つの力〉』 齋藤孝 NHKブックス 01.11
- (3) 池上彰の数々の著書 彼はかつてNHKで日曜日の「こどもニュース」を担当していた人で、彼の書いた本は本当にわかりやすい。とくに公民科での授業には参考になることがいっぱいである。
- (4) 『痛快! 憲法学』 小室直樹 集英社インターナショナル 01.4
『日本国憲法の問題点』 小室直樹 集英社インターナショナル 02.4
- (5) 『人間の大地』 犬養道子 中公文庫 83.11
『ロッキード裁判批判を斬る 1~3』 立花隆 朝日文庫 94.6
- (6) 『天皇と東大―大日本帝国の生と死』 立花隆 文藝春秋社 05.12
『東大生はバカになったか―知的亡国論+現代教養論』 立花隆 文藝春秋社 01.10
『脳を鍛える 東大講義『人間の存在』』 立花隆 新潮文庫 04.9
- (7) 『バナナと日本人』 鶴見良行 岩波新書 82.8
- (8) 『社会科学の方法―ウェーバーとマルクス』 大塚久雄 岩波新書 66.9
『社会科学における人間』 大塚久雄 岩波新書 77.6
- (9) 『コリアン世界の旅』 野村進 講談社+α文庫 99.1
- (10) 『チャイナ・カード 上・下』 ジョン・アーリックマン 角川書店 90.9
田中角栄がロッキード事件でなぜ失脚したかを、これほど説得力をもって描いた本はない。
- (11) 『チャイナ・インパクト』 大前研一 講談社
- (12) 『ジョン・ウェインはなぜ死んだか』 広瀬隆 文藝春秋社 82.12
『東京に原発を』 広瀬隆 集英社文庫 86.8
『アメリカの保守本流』 広瀬隆 集英社新書 03.9

- (13) 『お笑い 大蔵省極秘情報』 テリー伊藤 飛鳥新社 96.7
『お笑い 外務省機密情報』 テリー伊藤 飛鳥新社 99.10
- (14) 『日本の古代国家』 石母田正 岩波書店 71.1
- (15) 『日本社会の歴史—上・中・下』 網野善彦 岩波新書 97.4-
『日本中世の農民と天皇』 網野善彦 岩波書店 84.2
『新編明治精神史』 色川大吉 中央公論社 73.10
『民衆憲法の創造』 色川大吉 評論社 70.8
- (16) 『黒船前後・志士と経済』 服部之総 岩波文庫 81.7
『古代国語の音韻に就いて』 橋本進吉 岩波文庫 80.6
『全国アホバカ分布考—はるかなる言葉の旅路』 松本修 新潮文庫 96.12
- (17) 『邪馬台国はなかった』 古田武彦 朝日新聞社 71.11
『邪馬一国の証明』 古田武彦 角川文庫 71.11
- (18) 『隠された十字架—法隆寺論』 梅原猛 新潮文庫 72.5
- (19) 『結婚の条件』 小倉千加子 朝日新聞社 03.11
『松田聖子論』 小倉千加子 岩波書店 89.1
『『赤毛のアン』の秘密』 小倉千加子 岩波書店 04.3
なお酒井順子、香山リカなども一緒に。
- (20) 『斑鳩の白い道のうえに』 上原和 朝日新聞社 75.3
- (21) 黒羽清隆の数々の著書 彼は「歴史教育学者」として超一流。いま彼の本は手に入りにくい。
- (22) 安田喜憲の数々の著書 古代文明に関して環境考古学からせまる、非常に説得力ある諸論文。
- (23) 『栽培植物と農耕の起源』 中尾佐助 岩波新書 66.1 これは世界的名著といわれる。
- (24) 『照葉樹林文化 正・続』 上山春平・佐々木高明・中尾佐助 中公新書 69.10-
- (25) 『ミケルアンジェロ』 羽仁五郎 岩波新書 68.4
『都市の論理 第1・2部』 羽仁五郎 講談社文庫 82.12-
- (26) 『大仏建立』 杉山二郎 学生社 68.11
『大仏以後』 杉山二郎 学生社 86.7
『大仏再興』 杉山二郎 学生社 99.11
『西アジア南北記』 杉山二郎 学生社 78.9
- (27) 『天正少年使節と世界帝国 クワトロ・ラガッツィ』 若桑みどり 集英社 03.10
- (28) 『肉食の思想』 鯖田豊之 中公新書 66.1
『ヨーロッパとは何か』 増田四郎 岩波新書 67.7
この2書はヨーロッパ文明を理解する上で必読の書。世界史の授業はこれを読まずして…。
- (29) 『芋麻・絹・木綿の社会史』 永原慶二 吉川弘文館 04.12
- (30) 『銃・病原菌・鉄 上・下』 ジャレド・ダイヤモンド 草思社 00.10
これも世界史の授業には必須。
- (31) 松本清張の数々の著書 とくに『ある小倉日記伝』（なかに短編の『石の骨』『断碑』を含む）、『砂の器』『火の路』『黒い福音』『日本の黒い霧』『西郷札』（新潮文庫）
- (32) 山崎豊子『大地の子』『白い巨塔』『二つの祖国』『沈まぬ太陽』『不毛地帯』（新潮文庫）
- (33) 『人類の星の時間』 ツバアイク みすず書房 72.11
『マリー・アントワネット』 ツバアイク みすず書房 74.2
『マゼラン』 ツバアイク みすず書房 72.10
- (34) 『あゝ野麦峠 正・続』 山本茂美 角川文庫 77.4-
『飛騨の哀歌 高山祭』 山本茂美 角川文庫 81.4
- (35) 『始祖鳥記』 飯嶋和一 小学館文庫 00.1
『雷電本紀』 飯嶋和一 河出書房新社 94.6
『黄金旅風』 飯嶋和一 小学館 04.4
- (36) 『人間の条件』 五味川純平 岩波現代文庫
日本人としてぜひ読んでおくべき書物。
- (37) 『邪宗門 上・下』 高橋和巳 朝日新聞社 93.7
- (38) 『弥勒』 篠田節子 講談社文庫 01.10
- (39) 『侍』 遠藤周作 新潮文庫 86.6
『沈黙』 遠藤周作 新潮文庫 81.10

- 『海と毒薬』 遠藤周作 新潮文庫 60.7
- (40) 司馬遼太郎の数々の著書
 『明治波濤歌』 山田風太郎 筑摩書房 97.9
 『黒い雨』 井伏鱒二 新潮文庫 70.6
- (41) 『蝦夷地別件 上・中・下』 船戸与一 新潮文庫
 (42) 『小説 日本婦道記』 山本周五郎 新潮文庫 58.10
 (43) 井上靖の数々の著書
 『パリ燃ゆ 上・下』 大仏次郎 朝日新聞社 64.6-
 (44) 『四千万歩の男 上・下』 井上ひさし 講談社文庫 86.4-
 『国語元年』 井上ひさし 中公文庫 02.4
- (45) 『関妃暗殺』 角田房子 新潮文庫 88.1
 (46) 『人間の壁 上・中・下』 石川達三 岩波現代文庫 01.8-
 (47) 『二十四の瞳』 壺井栄 新潮文庫 57.9
 (48) 『絵の言葉』 高階秀爾・小松左京 講談社学術文庫 76.9
 『名画を見る眼-正・続』 高階秀爾 岩波新書 69.10-
 『ヨーロッパの旅とキリスト教』 紅山雪夫 創元社 96.9
 『絵画で読む聖書』 中丸明 新潮社 97.2
 『絵画を読む-イコノロジー入門』 若桑みどり NHKブックス 93.8
 『イメージを読む 美術史入門』 若桑みどり ちくまプリマーブックス 93.1

上記48の書は「歴史的分野」で「文化の単元」を授業する時、必須のものといえる。文化史のなかで歴史的名画について、私たちは往々にして「力強さが伝わってくる」とか「繊細なタッチに時代の特徴が表れている」などと情緒的表現でそれを評する。そんな説明は中学生や高校生にはわからない。そこで大切なことが「絵は読むもの」という観点からの解説である。ルネサンス期の絵の中にユリが描かれている。それは何を象徴しているのか。この画家は何を意図して蝶を描いたのか、ここに時計がえがかれている理由は何か。そんな解説がぜひほしい。

もうひとつ、大切なことは中世までの絵画や彫刻を鑑賞するためには、聖書を読まなければわからない。画家がこの絵にこめたテーマは何か、ということがわからない。その意味でまさに「絵は読むもの」なのである。そのことを教師が知るためにもぜひ上記の書を読んでおきたい。

- (49) 『源頼朝像 沈黙の肖像画-絵は語る4』 米倉迪夫 平凡社 95.3
 (50) 西岡文彦の数々の著書。特に印象派の登場以降の絵画史が説得力ある内容で書かれている。
 (51) 『東大で上野千鶴にケンカを学ぶ』 遙洋子 ちくま文庫 00.1
 (52) 『夜と霧』 フランクル みすず書房 61.3
 (53) 『ポケット詩集 I・II・III』 (童話屋) 98.1-
 この本は「学級通信」などを作る時に非常に便利な本。
 (54) 『福祉を変える経営 障害者の月給1万円からの脱出』 小倉昌彦 日経BP 03.10

特に第1章は「介護等体験」に行く前にぜひ読んでおきたい。

共同作業所で働く障害者の人たちの月給が4742円、日給にすると215円、したがって時給に換算するとなんと40円に満たないということを知っているか。この事実の裏にある社会、政治の諸問題をぜひ学んでもらいたい。この著者は誰もが知っているあの「クロネコヤマト」の創業者、後に「ヤマト福祉財団理事長」となった人です。惜しくも2005年に亡くなった。

(55) 受験参考書についても書いておく。いま一番若者たちの間で読まれている本といえば、マンガを除けば受験参考書ではないか。なのにこの類の本は「書評」には絶対にでてこない。若者の殆どが手にしている受験参考書について語らずして、「若者たちの文化」がかたれるのか。

以前とちがって、すぐれた受験参考書がいまたくさん出版されるようになった。あの「実況中継本」なる本が受験参考書を変えた。一部の先生方に言わせれば「あんな簡単なものしか読めなくなった」というであろうが、中身のレベルは低下したわけではない。むづかしい内容のみごとに分かりやすく解説しているのである。その中でも社会科学関係のものをいくつかあげておこう。

- 『地理B講義の実況中継 上・下』 権田雅幸 語学春秋社 これは名著！
 『日本史B講義の実況中継 ①～⑤』 石川晶康 語学春秋社
 『世界史B講義の実況中継 ①～④、文化史』 青木裕司 語学春秋社
 『ナビゲーター日本史B ①～④』 會田康範・河合敦 山川出版社

『ナビゲーター世界史B ①～④』 鈴木敏彦 山川出版

ここで国語の「現代文」に関して触れておく。どこの学校でも、生徒たちはこの「現代文」という科目に非常に手をやいている。それはこの科目の目的を勘違いしているからである。本をよく読む、本が好きという生徒がなかなか現代文のテストで点がとれない。自分は日本人で日本語なら意味はわからないでもないだろう、と試験勉強をしない。問題で出された選択肢もどれも「そう言えなくもない」ように思える。これでは試験勉強のしようがないではないか…。こんなことで勉強を放棄している生徒がかなりいる。こんな生徒に「国語の現代文は小説について学んだり詩の鑑賞をするのが目的ではない」ということをはっきり言ってやらないといけない。「現代文を学ぶ目的は大学で講義を受けるために必要な論理を学ぶのだ。大学へいった時に数々の論文を読まなければならない。その時のためのトレーニングなのだ」ということを説明してやらなければならない。

そのための最適な参考書が出口汪の『高Iからの出口の現代文講義の実況中継』（語学春秋社）と『出口汪のメキメキ力がつく現代文 ライブ1～6』（小学館）だ。そして不思議なことだが、現代文の勉強の要領がわかると（ということは文章の読解力がついてくると、ということだが）、他教科の成績もどんどん上がってくるのである。どんな教科の教師をめざす者も、このことは頭にいれておくとよい。

- (56)『世界で一番受けたい授業 1、2』 藤原和博 小学館 01.10-
『人生の教科書（よのなか）（ルール）』 藤原和博 筑摩書房 98.12-
『親と子の『よのなか』科』 藤原和博・三室一也との共著 ちくま新書 02.5

ここには「総合的な学習の時間」のヒントがいっぱい詰まっている。

- (57)最後に、日本戦没学生記念会編『きけ わだつみのこえー日本戦没学生の手記』（岩波文庫 95.1）、『十五年戦争』（光文社カップブックス 63.2）の2冊をあげておく。

いまから特別攻撃隊として敵艦に突入していこうとしている、眼の前で授業を聞いている学生と同じ世代の若者が「食事の時間を前にして、ごったがえしている木の椅子に座ってメンソレータムの効能書きを裏表丁寧に読み返し、読み返しし『文字に飢えるとはこういうことか』としみじみ思った」と遺書に書く。そんな社会がつい60年ほど前に、この日本にはあったのだ。

鹿児島県知覧にある平和祈念館。ここはその特別攻撃隊の基地のあったところだが、ここから沖縄まで650km、飛行時間にして約2時間30分。彼らは狭い操縦席で何を考えていたのだろうか。それを思う時、この祈念館の壁一面に貼られている、特攻死した1036名の若者の写真は涙なくしては見られない。